

Title	北朝鮮を訪問して(国際シンポジウム：南北朝鮮の現状を語る：統一に向かう朝鮮半島 第二部 パネルディスカッション)
Author(s)	小田川, 興
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.18,2000.11 : 103-111
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3551
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

第二部 パネル・ディスカッション

北朝鮮を訪問して

小田川 興

今、康仁徳先生が一時間近くにわたって、実際に北と交渉された立場から、また北のご出身の立場から、非常に具体的な話をされました。それに付け加えることももうないと思いますが、最近の北の状況について、昨年八月末から平壤、板門店、白頭山を取材できましたので、そういったことを土台にして、フィールドワークから分析すると今の南北、特に北はこうではないだろうかとい

うお話ができるかと思います。

昨年、実は十四年振りの北朝鮮訪問でした。ですから時間的な経過の中で、北がどういうふうに変わったかということを考えるためにも、では十四年前はどうだったのかということから話してみたいと思います。

亡くなられましたけれども、岩井章さんという総評事務局長がおられ、長いこと朝鮮の自主的平和統一を支持する日本委員会を主宰しておられました。八五年の夏に、その代表団が平壤を訪問するということで、私が同行したという形でした。八五年と言いますと今二〇〇〇年になりましたから、十五年前になるわけですが、当時は、最近の北朝鮮よりは結論的に言うと、開放の雰囲気があつたということが、特徴的だったかと思います。なぜ開放的だったかということですが、現象面で言うと、当時はデパートを見学しましたが、入るとすぐに化粧品売場があつて、女性の軍人を交えてご婦人が殺到しており、自分を飾るという機運が出ていました。それから外貨ショップ、つまりドルや円で物が買える外貨ショップが出現した後でして、物はそんなにありませんでし

たが、自転車もテレビも並んでいるという具合でした。私はそこで早速、ズボンを一着買いました。裾上げなどもあつと言う間で十分以内でできまして、びつくりしたことを覚えています。もちろん板門店と平壤の間、道路に車はほとんど通っておらず、まるで耕耘機が自家用車のように走っていました。

このときに見た全体の感じは、人民と言いますか国民の目が死んでいるということでした。まったく生気がない。命じられたとおりのことをただ黙々と命令に従ってやるという感じが非常に強かったです。このときも確か七日間くらいいたと思いますが、いろいろな人をこちらは見ているわけです。「この人、違っているかな。ちよつと目が生きているな」と思ったのは、わずかに二人でした。そのうちの一人はご婦人でガムをかんで歩いていました。非常にびつくりしました。多分、外交官の関係の方のご婦人かなと思いました。

その次に実はもう一度行っているのですが、これは平壤ではなくて、九七年の八月でしたか、経済特区である羅津・先鋒、東海岸の方のずっとロシア国境に近いとこ

ろですが、その自由経済貿易地帯に幸い入ることができました。それは民主党の議員の方とか、実はシンポジウムがその直前にあったものですから、中国、および日本の学者、専門家の方たちと一緒に行ったわけです。この経済特区というのは、北が鳴り物入りで経済再建の大きなバネにしようということで始めた地区です。昔、旧

日本の植民地時代には、確かに羅津には部隊がありましたし、非常に日本ともつながりの深いところです。そこに行つて来ました。さきほど康先生のお話にもありましたが、ソ連の主導で組み上がった北の経済のまさに具体的な形として、例えば、ソ連からの原料で動く化学工場、港にセメントをおいておく施設とかがありますが、それがまったく動いていない。特に化学工場の方は、もうすでに機械がさび付いていることが遠くからでも分かるわけです。動いているのは、先鋒にありました火力発電所だけでした。町中の小さな規模の町工場みたいなところは、ゴトゴトと何かやっていたようですが。とにかく煙を上げているのは火力発電所だけでした。実はこれが、朝鮮半島エネルギー開発機構（KEDO）、つまり

日米韓が中心になつて、北が核開発放棄をすることの引き替えに進めているプロジェクトによる重油供給です。その重油で煙が上がっているという具合です。ただし一泊したホテルは、まったく何の前触れもなしに停電して三〇分くらいつかない。ゆえに冷房も切れてしまう、ということを経験しました。

その一方では、九七年でしたが、この経済特区の町中で、日本というキオスクのような小さなボックス型の売店が登場していました。これはこの年からだったそうです。ただし、ものはあまり並んでない。それからまた農業で言えば、とうもろこしの協同農場のできが悪くて、かなり背丈の低いとうもろこしもありました。それぞれの家がちよつとした空き地、庭先などいわゆる自留地に植わっているとうもろこしは八月の時点で二メートル以上はありました。これは立派なものでした。またあるアパートの二階のベランダには、「卵あります」との札がかかっているわけです。恐らくその札を見て、卵がほしい方は、自分の持つているものを物々交換するか、あるいは外貨で買えるのでしょうか。このような非常

に素朴な市場経済のスタートがそこに見られました。

その後の訪問が九九年です。ですから平壤は十四年振りでです。私が一番印象深かったのは、新聞にも書きましたが、非常に平壤の人の顔が明るいのです。さきほど申し上げたように、八五年のときに死んでいた目が輝きだしたというのが実感でした。信じていただきたいと思っています。なぜ明るくなったのか、です。北朝鮮の場合、ご存じのように九五年から水害、干ばつということで連続自然災害が起こり、非常に食糧生産が落ちたということとで、配給は平壤でもストップし、そして先ほどの話にもありましたが、餓死者も出るという状況です。昨年の明るさというのは、九五年から四年経った段階で、一つには国際的な食糧支援があるからでしょう。九五年からでも国連からその時期までに全部で一四億ドル近い食糧プラス肥料、医薬品などの支援が来ています。そして中国からも食糧、および油が来る。これは豆満江を渡ったり、鴨緑江を渡ったり、特に中国にいらつしやる同族つまり朝鮮族の方々、親戚ルートから来る。またそれは一つのビジネスルートにもなっています。また闇のうまい

ルートがあり、例えば中国の軍と北朝鮮の軍のよく知っている同士の闇ルートで食糧が運ばれてくるということもあります。それが背景の一つです。

もう一つは、九九年は少なくとも大きな災害がなく、わりと天候が良くて、久しぶりに穀物生産が増えました。そういうことがバックにありまして、その上、先ほど申し上げたように小さな売店なども平壤に出ていましたし、自分で何か工夫して物々交換をしたり、蓄えの中から出す、あるいは外国に親戚のいる人はそこからの送金をもとに日々、やりくりしていけば大丈夫かなという自信めいた、あるいは確信めいたものを感じました。実態は平壤で不規則ながらも配給が回復したという時期でしたので、歯を食いしばってでも生き抜くという状況だったのでしょうか。何とかなってきたという実感が湧いてきたのではないのでしょうか。多少この先、期待できるのではないか、生活上の期待ができるのではないかという状況が、市民の顔を明るくさせていたのではないかと思います。

北の工場の稼働率が近年になって三割を割り込んだと

いう指摘もありましたが、平壤から大体一時間足らずですが北の方へ向かって、安州というところがありまして、そこを歩いてみましたところ、ここの肥料工場が煙を上げていました。これも食糧生産の回復に結びついていく動きではないかとみた次第です。

それから北の問題は、発電が非常にうまくいかないということが大きな柱になっていますが、白頭山のふもとで見たのは、非常に小さな小規模の発電所です。見たところ、田舎の駅のような小さなところに発電機を置いて水力発電を行っています。白頭山から流れ落ちている水を利用して、地域の電力をまかなっています。工場などはとても無理です。しかし、こういう発電所は小規模ながら、当時、全国に五千個所あると聞きましたし、最近の資料によりますと六千個所に増えたとのことでした。そんなに早く増えるものかなという気もしますが、これも自力更生の実例ですね。経済活動による不振克服の策の一つだと思いました。

それが現在の大体の実態です。いずれにしろ私は平壤の市民の顔から、昔よく言われた言葉ですが、「人間の

顔をした社会主義」という言葉を思いました。冷戦が崩壊して十年も経ち、九九年でようやく北の人たちも何か人間らしい顔をしてきたなという感じです。ただし、残念ながら地方はまだ暗い感じでした。やはり地方までは配給も安定していないし、そういう具合に一遍止まった工場が動かない状況になっています。工場の機械をばらして売ってしまったというところが随分ありますし、それをまた、金正日総書記が、そんなことをやってはいけないということでストップ命令を出したのは、確か二年か三年前だったと思います。

そういう具合に多少の希望の兆しは見えているのだけれども、そこへ規則的な動き、あるいは保証されたシステムがあつてその方向にいくのではなく、手探りであかりを探していく状況が続いていると思います。つまり、金正日政治というのはこれからどういうことになっていくのか、そこをやはり見ておかないと、北がどうなっていくのか、そして南との関係がどうなっていくのかが分からないわけです。

先ほど康先生がいろいろおっしゃられましたので、付

け加えることもないと思いますが、ただ先生も指摘された変化の兆しというお話にもし補足できることがあるとすると一つは、九八年に行つた憲法改正で、個人の合法的経済活動を認める、経営活動を認めるという条項が入りました。それから独立採算性についてはつきり憲法で強調するということが、それからまた旅行の自由も条文に入れるというようなことが、変化のうちの一つではないでしょうか。ただしこれは、実態がそうなっているもので、ここはもう法文化しておかなければまずいだらうという判断があつたような気がします。

また、今年の共同社説というのがありました。労働新聞と軍、青年組織の機関紙三つによる共同社説ですが、その中で目についたのは、実利を非常に強調し始めたなということです。実際の利益の実利です。これまでももちろん、社説で訴えたことはありましたが、どちらかというとそれが随分目立つような気がいたしました。それはなぜなのかと思いますと、例えば韓国の現代グループとの金剛山観光で、先生も先ほどご指摘されましたが、北にとつては観光客が増えて入山料が取れるわけですか

らいわば、日銭が入るような感じなのです。また現代側も温泉の設備もつくりましたし、多分、船の上でしようけれどもこの先、ギャンブルもできるようにしようとしています。そしてまた日本人観光客も早ければ今年の春から世界の名山、金剛山に登れるわけです。そして在日の方々に對しても門戸を開くのは間違ひなく、ただ今、実務交渉をやっているようです。そういうありがたい金剛山観光をどのように南北対立の中で位置づけたらいいのかということは、北も実は頭の痛いところがあるそうです。政経分離と言っていますが、北にとつてはすぐに政治問題になりやすいところで、現に昨年、韓国のご婦人が一人、その人の発言とそれに応酬する北側の案内員との間にトラブルがあつて、一時拘留されたという事件もありました。

いずれにしろ、北としてはなんとかここで経済再建を軌道に乗せなければ、相当基盤を固めた金正日氏としてもやはり不安はあると思います。そうするとやはり、実利を追求し、独立採算性ということでキャピタリズムの方にはいきたくないけれども、やむを得ないということ

ろでしょう。

関寛治先生という方が立命館大学におられました。残念ながら亡くされましたが、非常に北との問題を深く追求された先生です。この先生が実際に北に行つて聞いたところ、北側の中堅幹部の人によると主体^{チュウテ}キャピタルイズムである。どうして市場経済と言わないのかなと思います、そういう方向に走っているわけです。

問題はやはり、日本との関係です。私は日本人ですから、日本人としての役割がどこにあるべきか、どこにくべきかということだったのですが、幸いにして今、北がついこの間、イタリアと国交を樹立しました。それからまたオーストラリア、あるいはフィリピンとの間でも少しずつ外交関係の樹立に向かっています。今、動いているという段階です。北はまずアメリカとの関係改善が優先ですが、日本との国交樹立が一番北の経済にとって確実な原資が入るということは間違いないわけです。日本は韓国に対して有償無償五億ドルという、日本側から言わせると経済協力基金、韓国側では賠償というそれだけの措置をとっています。これが実は韓国の六〇年代か

ら七〇年代にかけての経済成長の大変大きな支えになったというのは厳然たる事実です。北の場合は、今の状態がああいうことです。これは確実に日本からの国交回復にともなう経済的な措置を期待することは間違いないことでもあります。

ただここに、私としてはもつと歴史をさかのぼつて日本人として考えたい、考えなければならぬと思います。一九一〇年が日本が韓国を併合した年ですが、それをさらにさかのぼつて十九世紀末から、日本はいろいろな形で、大陸侵略の兵站基地という見方もありましたが、ロシアとの確執という側面もあつて次々と占領植民地化する策をとりました。その結果が一九一〇年の併合になり、そして四五年の無条件降伏で、日本としてはまったく何の策をとる術もなく、アメリカとソ連の分割にまかしてしまつたわけです。そんな歴史的な経緯を考えますときに、私は少なくとも道義的責任はとらなくてはならないと思います。

では何をすればよいのか、どういうスタンスでやればよいのか。もちろん経済は大事なことです、絶対に経

済だけではありません。例えば、文化の問題でも、今からでもできることはあるのではないか。教科書を送ろうという運動も今から始めるといことも聞いておりますし、さまざまことが可能だと思います。もちろん日朝交渉の中で拉致問題、それから日本人配偶者の里帰りの問題などありますが、それがお互いの取引材料になつていくのはまずいのではないでしょうか。まず心のぎずなを結ぶという気持ちで、すべての政治的な議題は一度まな板の上にのせてみる。そういう同時並行的なやり方が望ましいなと考えております。

いずれにしろ日韓条約というのはアメリカが、冷戦状況の中でソ連、中国の存在を意識して、日本と韓国の尻を押してやらせたという経緯がありました。今、日本が北朝鮮との間で歴史認識に基づいた自主的な対北朝鮮対策ができないようであれば恐らく、アジアからの信頼は十分に回復することはできないのではないかと思つています。

私は九八年に、北には入れませんでした、中朝国境、豆満江一帯を歩いてみたことがあります。延辺朝鮮

族自治州の延吉という州都ですが、ここで食糧難民の子どもを何人も見ました。それからこれは韓国のあるNGOですが、それらの子どもさんを保護するというか、とにかく生きてもらわねばならないということで手厚い支援の手をさしのべておりまして、その子どもさんとも会うことができました。

実を言うと、白頭山の中国側からその団体の人と一緒に登ることになりましたが、その子どもさんと二日くらい一緒にいました。私はへたですが、若干できる韓国語をしゃべつてみましたが、この子供さんはまったく笑いませんでした。韓国のNGOの人に対しても笑いません。そのNGOの人が自分を助けてくれているのだということは十分理解し分かった上でも、まったく笑顔を見せない。こういう子どもさんは実は、昔、日本が植民地にしていたところで今、飢えている子どもです。親御さんは飢え死にしたそうです。そういう精神状況が今、この国とアジアにあるのだ、日本と朝鮮半島の間にあるのだということをもう一度私は思い返したい。そこから何が平和なのか、何が繁栄への共同体をつくっていくのか

ということを考えていきたいと思っています。

拙い話でしたが、私のコメントをこれで終わらせていただきます。後ほどまた質問にお答えしたいと思います。ありがとうございます。